

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 24 年目
創刊 1989 年 No.275

2012年5月号



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 8



三月一九〜二日にかけて福井大学で日本原子力学会春の年會が開催された。当初は昨年三月に開催予定だったが、東日本大地震及び福島原子力発電所事故の影響により急遽中止となり、一年ぶりに開催に至った。初日午前一般公開の福島事故特別セッションは、ウィーンに本部のある国際原子力機関（IAEA）の天野事務局長のビデオメッセージが紹介された。原子力の将来について「原子力発電は多くの国にとって依然として重要な選択肢」、「IAEAの最新の調査によれば、二〇三〇年までに、少なくとも九〇基、最大で三五〇基の原発が増加する見通し」であり、「日本がこれまで長年に亘って培ってきた知識、技術及び人材が今後も維持されること、日本にとって重要であり、更には原子力を必要とする世界各国にとっても重要」と述べられた。その後、東京電力、関西電力、原子力機構などから報告があり、一般参加者も含めた活発な討論が行われた。

筆者は、初日午後の「福島事故を踏まえた核燃料分野の課題と展望」セッションで「日本におけるシビアアクシデント研究の経緯」と題する招待講演を行った。我が国のシビアアクシデント研究の経緯に加えて、福島事故を踏まえた今



後のシビアアクシデント研究の課題と展望について見解を述べた。また、二日目午後には総合講演「国際原子力人材育成大学連合ネットワークの構築とモデル事業」において、「戦略的国際原子力教育」と題する講演を行った。京大が幹事校を務めたタイを始めとするアジア諸国への原子力人材育成の成果と今後の計画について報告した。いずれも活発な討論があり、福島事故を受けて、両分野で新たな展開が必要であることが関係者の共通認識となった。

さて、これまでウィーンと京都の共通点として、古都としての歴史と伝統を挙げて来たが、今回はその精華とも言うべき歴代皇帝や天皇の面影が随所に残されていることを再度紹介したい。ウィーンは一九八一年までの六四五年間、欧州随一の名門ハプスブルク家が君臨した。そのため、新旧王宮やシェーンブルン宮殿などの居城、戴冠式が挙行されたシュテファン寺院、時の皇帝が建設したカール教会やヴォルティエフ教会、ハプスブルク家の収集品が展示されている美術史博物館、宮廷オペラ座であった国立オペラ座など、歴代皇帝に関連する建物は枚挙にいとまがない。

一方、京都は東京遷都までの一〇七五年間、歴代天皇がご在所された。そのため、宮城



である御所を始め、市内に八二ある神社、二六八二ある寺のうち、歴代皇室と関連するものが実に多い。例えば、上賀茂神社は平安京遷都時に桓武天皇が行幸されて王城鎮護の神とされ、天龍寺は後醍醐天皇の冥福祈願のため建立された。第五〇代桓武天皇から第三二代明治天皇までのほとんどの天皇と天智天皇の計六八代の天皇陵が市内各所にある。こちらも枚挙にいとまがない。いずれも両市の観光に絶大な貢献をしている。

余談であるが、筆者は日曜午前に御所のグラウンドなどでソフトボールの練習や試合をしている。また、学生時代に毎日のように通った通学路脇には陽成天皇陵、理学部近くには後一條天皇陵がある。日頃はほとんど意識しないが、歴代皇室と日常的に何らかの接触があることに改めて気付いた。先日、醍醐・朱雀・村上三帝と関連の深い醍醐寺に家内と花見に訪れた。霊宝館のしだれ桜があまりに見事だったので、その雰囲気が少しでも伝わればと思い、趣味のスケッチを掲載させて頂く。

■杉本純

京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■